

館

報

1998
第3号

中原中也記念館



撮影 北嶋 俊治 氏

目次

■ 中也生誕九十年の諸行事を終えて	福田百合子……………1
■ 碑の前で、それでも……………安原喜秀……………2	
■ 寄贈資料……………2	
■ 中也とランポールの脳味噌：朝比奈諒……………3	
■ 企画展「中原中也とランポール」……………3	
■ 父のプレゼント……………諸井泰子……………4	
■ 新資料紹介……………4	
■ 生誕九〇年・没後六〇年記念行事……………5	
■ トピックス「中也の帽子」再現……………5	
■ 「私の好きな中也の詩」集計結果……………6	
■ 刊行物紹介……………6	
■ 中原中也生誕九〇年祭……………7	
■ 公開講座の記録……………8	
■ 中也生誕九〇年記念大会……………8	
■ 中原中也記念館の記録……………9	
■ 聞き語り「中也ゆかりのひとびと」……………10	
■ お知らせ……………12	

中也生誕九十年の諸行事を終えて

中原中也記念館館長 福田 百合子

中原中也記念館開館の平成六年から九三年を経過し、平成九年にはいよいよ中也生誕九十年没後六十年の節目を迎え、四月二十九日の誕生日を中心に、多くのイベントが行われました。中でも高田公園に於ける詩の朗読会の際、中也の父謙助が建立に尽力した維新ゆかりの七脚頭彰碑前に、小学生が勢揃いした姿が印象的でした。顕彰碑は堂々と丈高く、石段の上が舞台に使われたのです。公園中ほどの中也詩碑がうずくまるように据わっていること、対照的であり、感慨深い情景でした。

十月二十二日の命日には、碑前祭と墓参。詩碑周辺にバラソルをかざした舞踊の人たちの衣装が翻り、彩りを添え、男女高校生の中也詩朗読が、若々しい調和をもって響き合いました。墓前にそそいだ芳醇な酒の香は、メルヘンの世界の彼方まで風に吹かれて広がるようでした。

教育会館でのコンサートでは、中也詩に作曲された諸井三郎のピアノ曲を令嬢諸井泰子さんが弾いて下さいました。

特別企画展で、中也とフランス文学、特にランポール詩との関わりを再認識する折を得たことも大きな収穫でした。

中也の会の研究大会での講演、シンポジウムは勿論のこと、皆様方からいただいたご支援の数々は本当に嬉しく、有難く心より御礼申し上げます。開館五年目の本年は、記念館の内容充実の年として、次の節目生誕百年へ向けて、新しく歩き出したいと念願し、中也生誕九十年の諸行事を無事終えた感謝のご挨拶と致します。

碑の前で、それでも

安原喜秀



命日というその日は、深い秋にしては、とりわけ暖かな、いい日和でした。

ここ、湯田温泉にでかけてくるのは三度目で、春に母ののぞみをかなえようと、飼っている迷い犬を病院に預けたり、障害を払って、母の供をしたのが初めてでした。

二度目は四月の中原賞授賞式の催しの際。

次第に、この街のたたずまいは身近になってきていました。かつてバブルの直前の頃であったか、記念館設計画のお話を東京でおきました折り、この街の雰囲気や景観に興味を覚え、目抜き通りもそれ程広くなく、そこから露路道がチヨコチョコと張り廻らされているのだからかと勝手に考えたものでした。

実際は、広い通りが真っ直ぐに伸びて、その両側はところ所に、高いビルや大きなホテル・旅館が建ち並び、それでも空は開けていて、そこに差し掛かる横道

もあつげらんとして、古い店や宿を見て歩く他所者が目立つほど、人の往来も少ないのです。

私は前日、神奈川の大学で、近代建築に道を拓き「建築は感動を与えるものでなければならぬ。そのために建築は……でなければならぬ」と声高に主張し続けていた建築家の話をして、急いで飛行機にも乗り、ここにやってきました。

朝、早目にホテルを出て、碑前祭の会場となる高田公園に立ち寄ってみました。まだ新鮮な朝の陽の降りそそぐ中、数人の関係者が身も軽く、演台とおぼしき簡素な敷台や、折り畳み椅子、机などを地面に並べておられ、周囲にはポツンポツンとあらぬ向きに、日向ぼっこをしているような人の姿が目に入りました。なにかが私の中に少しずつ貯っていくのが感じられました。

向きを変え、裏道を通って、近代建築の成果に満ちた記念館に入ると、暫くして、初めて眼にする「テップ・カット」なるものが行われ、「中原中也とランポー」展の入口が開かれ、私は父宛の一通の手紙の置かれた場所を探しながら観て楽しみました。

またたく間に時間は無くなり、再び公園の会場へとむかうと、碑前には先程よ

りは人々が集まっており、勧められるまに前の方へと歩み進むうちに、だんだんと、あの多くの方の思いが凝縮されたような、存在感のある石碑に近づくにつれ、まわりの方々の、それぞれに熱い志を秘めた眼差しにぶつかるとともに、私はこの場でどうしたらいいのかとまどつていました。

私の、詩人についての知識は断片的なもので、遠い以前に親しんだ詩の数々も、まったく定かでない有様。最近亡くなった父からでさえ、たまに漏らした数えるばかりの思い出話の他は、遂に、何も聞き出すことはできませんでした。

とこうするうちに、小さな碑前の集いは、のどかな所で厳かに始まりました。心の遣り場をみつけあぐね、ただただ父をおしてお会いした方々のことを憶い、研ぎ澄まされた今詩人による朗読をきくうちに、いつしか私は気がついたら泣いていました。

「これは感動なのだ」と思いました。しかしどうして？ よくは解らないけれど、ただ、そのようにしてそこにいたこの私にも、詩が呼び水となり、全てのものが溶けあつた興奮が漲りました。

その詩は、飛行機便も、新幹線も、広い通りも、大きなビルも、こんな近代建築等もないときのものでした。



◆安原喜秀氏

中原中也が最も親しく交わった友人安原喜弘氏の子息。建築学専攻。居心地研究者。東海大学教授。

寄贈資料

- 村井康男宛 中原福・呉郎書簡 村井福子氏 中原フク写真 中原美枝子氏
 - 中原フク筆・色紙 中原美枝子氏
 - 中垣茂樹氏所蔵アルバム(長谷川泰子の写真あり) 中垣芽美氏
 - 高田公園詩碑建設時の写真 和田健氏
 - 楽譜(複写) 諸井三郎作曲「臨終」「朝の歌」「妹よ」「春と赤ン坊」 桑原智恵氏
 - 「ダゲイスト新吉の詩」 NHK「大岡昇平・時代への発言」(ビデオ) / NHK「中原中也・思い出すま」野々上慶一(録音テープ)
 - 「中村古峡療養所案内」 芳賀肇一氏
 - 「高田博厚作品集」 中村民男氏 福井市美術館
 - 江藤淳著「小林秀雄」 江藤淳氏
 - 宇佐美斉著「詩人の変奏」同訳「ランポー全詩集」他 宇佐美斉氏
 - 山根史郎著「夜の權歌ーわが生のうちなる中原中也」 山根史郎氏
 - 佐々木幹郎編「中原中也の恋の歌」「山羊の歌」「在りし日の歌」 飛鳥企画
 - 中原中也関係番組ビデオ(「山陰さん山陽さんーあいたいな中也に」)「西日本の旅ー中也出逢いの旅」他) NHK山口放送局
- このほかにも、研究論文や著書などをごくの方々からお寄せいただきました。

中也が翻訳にあたって利用できたと思われるフランス語辞書として、私の提供した「模範仏和辞典」が展示してあるのを見て感銘を受けた。翻訳の道具としては、今日の目からすると、限界を感じさせるのにもかかわらず、中也のランボー訳が時として今日の翻訳家でも及びのつかぬ牙えを示す、とすると、その理由は、二人の詩人の間に言語の壁を超えた親和力が働いていること以外にないと思っただからである。

その一例として、「恥」をあげよう。学業に身がはいらず落第し、「肝やき息

頭に刃、
脇に砂礫を、
腸に火を

加へぬかぎりは、寸時たりと、
五月蠅い子供の此ン畜生が、
ちよこまかと
謀反気やめることもない

モン・ロシウの猫のやう、
何処も彼処も臭くする！

——だが死の時には、神様よ、
なんとか祈りも出ますやう……

中也とランボーの脳味噌——朝比奈 誼

子」として両親を落胆させ、ついには故郷の山口を捨てなくてはならなかった、そしてその後も周囲に波紋を投げつけた中也がこの詩に自分を重ねたとしても不思議はない。

刃が脳漿を切らないかぎり、
白くて緑くて脂ぎつたる
このムツとするお荷物の
さつぱり致さう筈もない……

(あ、奴は切らなけあなるまいに、
その鼻、その唇、その耳を
その腹も！ すばらしや、
脚も棄てなけあなるまいに！)

だが、いや、確かに

第二聯の「奴」、第四聯の「五月蠅い子供の此ン畜生」はランボー自身をさす。制作年が不明で、無頼放縦な息子に手を焼く母親の嘆きの口調を真似たとも、若者に結婚生活を破壊されたヴェルレーヌの罵りを再現したともいわれるが、いずれにせよ、何かにつけ災いの種をまく自分の「五月蠅い」性質を自嘲的に歌った詩とみてまちがいなからう。

「このムツとするお荷物」のところ、素直に訳せば、「いつも新しい湯気をたてるこの塊」となる。中也の訳では自らの「脳漿」に対する嫌悪感がいつそう切実なものに感じられるのではないか。なお、「モン・ロシウ(ロッキー山脈)の猫」とは、スカンクのことらしい。

(企画展資料出品者・仏文学専攻)

企画展 中原中也とランボー

中原中也記念館ではこれまで「中也の軌跡」ⅠⅡⅢと題する企画展を行ってきましたが、今年度はその流れをいったん中断し、翻訳者としての中原中也に焦点をあてた企画展を開催しました。

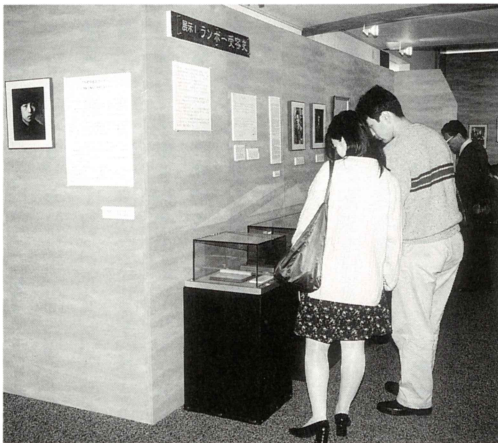
中也はアテネ・フランセや東京外国語学校でフランス語を学び、早い時期からフランスの詩の翻訳に取り組んでいます。今回はその中でも中也が最も多くを訳したランボーについて取り上げました。

監修は北川透氏(詩人、梅光女学院大学教授)と吉本素子氏(早稲田大学非常勤講師・フランス文学専攻)にお願いしました。

——企画展の構成は次の通りです。——

Ⅰ ランボー受容史

日本におけるランボーの受容の歴史を、永井荷風の訳詩集「珊瑚集」(大正二年)



の初版本、象徴派の詩を初めて紹介した上田敏の訳詩集「海潮音」(明治三十八年)などによって示しました。富永太郎や小林秀雄との交友によってランボーの詩と出会った中原中也が、やがてフランス語を学び始め、先人の訳業に啓発されながら研鑽を積んでいく過程を、翻訳の筆写原稿などで展示しました。

Ⅱ 詩人ランボー

中也が深い関心を示したフランスの詩人ランボーの生涯と業績について紹介しました。ランボーの筆跡そのままを印刷した最新のフランスの書籍や、最初にランボーの詩を集めて出版したベリシヨンの編集による詩集、日本で刊行されている全集、ランボー記念館のパンフレットなどを展示。また、写真や年譜、世界地図等によって《大歩行者》ランボーの足跡を示しました。

Ⅲ 〈翻訳者〉中原中也

中原中也の翻訳は直訳でない独特の訳だと言われています。中也の訳業の成果を中心に、その特徴を同時代的小林秀雄、堀口大学の翻訳と比較。京都大学教授宇佐美齊氏に解説を加えていただきました。また、中也の自筆の翻訳原稿や訳詩が載った初出の雑誌の数々、戦前の翻訳詩集、中也や当時の翻訳者らが用いた仏語辞典なども展示しました。

企画展の開催に際し、中原家をはじめとして貴重な資料をご提供くださった皆様、ご協力・ご助言をいただいた皆様に、厚くお礼を申し上げます。

記念館主催

生誕九〇年・没後六〇年 記念行事

平成九年の秋、中原中也の六十回目の命日を控え、生誕九〇年・没後六〇年記念行事が次々と催されました。

まず、九月二十三日（火・祝）の午後、「復活・スルヤ演奏会'97」が山形県教育会館ホールを会場に開かれました。中也が二十歳のころ交流をもっていた昭和初期の音楽団体「スルヤ」の音楽会を、平成版として復活させたクラシックのコンサートです。

諸井三郎らによる当時の曲や、溝上日出夫氏によって新たに作曲されたものが、あわせて演奏されました。演奏の合間には、語り手としてNHKアナウンサーの加賀美幸子氏の朗読なども加わり、中也詩のもつ豊かな音楽性を感じられるコンサートになりました。

中原中也とフランス文学との関わりに注目した特別企画「中原中也とランボー」は、命日当日の十月二十二日（水）にテープカットで始まりました。

また同日、中也の最初の詩碑「帰郷」が建てられている高田公園では、碑前祭



詩碑「帰郷」の前で創作舞踊を披露

が行われました。東京や神奈川から中也の友人のご遺族も参列され、地元からもゆかりの人たちが集まりました。中也の詩をテーマにした加藤舞踊学院の皆さんの創作舞踊、第二回中原中也賞受賞者の

長谷部奈美江さんや中也の後輩にあたる県立山口高等学校生徒による詩の朗読もありました。中也の結婚式で日本舞踊を披露したという花柳寛寿美さんの思い出が語られたあと、実弟の伊藤拾郎さんのハーモニカ演奏を聞きながら、列席者一同で白い菊の献花をしました。中原中也記念館前庭ではフランスのカフェーにちなんで熱いコーヒーが無料サービスされました。

同日の夜にはジョイント・コンサート「一つのメルヘン」が山形県教育会館ホールで開かれました。前半はシャンソン歌手長谷川きよしさんの歌と女優吉行和子さんとのかけあいのおしゃべりや詩の朗読、後半は山口でもすっかりおなじみになった歌人福島泰樹さんの「絶叫コンサート」が行われました。福島さんは中也の詩の世界を熱演されました。中也の末弟の伊藤拾郎さんも特別出演、ハーモニカの演奏を披露されました。

十一月七日（金）には、やはり山形県教育会館ホールで、ランボーとヴェルレーヌの交流を描いたイギリス映画「太陽と月に背いて」（一九九五年／アニメスカ・ホランド監督）を上映しました。これは今回の特別企画展のテーマにちなんだものです。

一九九七年は同じ山口市出身の文学者嘉村磯多の生誕百年とも重なっており、記念館主催の行事の外にも、山口市内の各施設で中也と磯多を取り上げた展示や催しがありました。また、県内外からも中也の詩を取り上げた催し物のお知らせをいただきました。



トピックス 中也の 帽子 再現

中原中也の顔写真として最も親しまれているのは、十八、九歳のころの帽子をかぶった写真でしょう。教科書や詩集の口絵などでもおなじみです。

この写真をもとに、山口県小郡町の帽子専門店、中原中也の帽子を再現してもらいました。リボンのついた黒の山高帽で、リボンのすぐ上を中折りに、てっぺんを平らにしておきます。

この帽子屋さんによると、大正から昭和にかけて、当時のおしゃれな人たちの間では、こんなふうに帽子を少しくずしてかぶることが流行していたそうです。ただし、本物の中原中也の帽子は現存していないので、材質などを確定することはできません。

平成九年四月の中原中也生誕九〇年祭のときには、できたばかりのこの帽子をかぶって、詩人の谷川俊太郎さんが朗読し、歌手の加藤登紀子さんが歌うという一幕もありました。

再現された帽子は、現在中原中也記念館に展示しており、注文に応じて販売もしています。すでに全国で二十個近くの「中也の帽子」がかぶられています。

♥千の天使がアンケートする

「私の好きな中也の詩」

集計結果

平成九年四月二十九日から六月三十日までのおよそ二か月間、中原中也記念館では生誕九〇年・没後六〇年記念行事の一つとして「私の好きな中原中也の詩一〇〇〇人アンケート」を実施、一般の読者のみなさんに中原中也の詩の中から好きな詩三篇以内を選んでもらい、百字以内の感想文を添えていただきました。「宿醉」（「山羊の歌」）にある「千の天使がバスケットボールする」の一節を「千の天使がアンケートする」ともじって、この企画のキャッチフレーズにしました。

専用のアンケート用紙を全国の文学施設などに置いていただいたり、新聞紙上でも紹介されたおかげで、全国四十二都道府県から八百九十人（応募総数二、一八三点）の声が集まりました。

なかには、学校でまとめて応募された中学・高校もあり、十代の人たちの初々しい感想がたくさん寄せられました。

結果は教科書などで出会う機会の多いポピュラーな詩が上位を占めました。が、「詩人は辛い」「酒場にて」など、今まであまり注目されていなかった詩にも、若い人を中心に人気が集まり、話題を呼びました。

それぞれの詩に寄せられた感想文の中から、山口市在住の詩人和田健氏と中原

中也記念館の福田百合子館長の選考により、百六十四編の「心に残る感想文」が選ばれました。

また、このアンケートの結果をふまえて、八月九日（土）に座談会を開きました。出席者は研究者の立場から中原豊氏、地元で詩作を続けて来られた和田健氏、アンケートの応募者から横田昌子氏、そして進行役の福田館長の四人です。出席者のみなさんはそれぞれに中原中也の詩



座談会の様子。左より、福田、横田、中原、和田の各氏。

の愛読者ですが、作品の解釈、中也詩との出会いから個人的な関わりにまで話が広がり、中也の魅力について熱っぽく語っていただきました。

総合ベスト10

- 1 汚れつちまつた悲しみに……
- 2 帰郷
- 3 生ひ立ちの歌
- 4 一つのメルヘン
- 5 月夜の浜辺
- 6 サークス
- 7 骨
- 8 詩人は辛い
- 9 春日狂想
- 10 また来ん春……

このアンケートの結果は小冊子にまとめ、「天使の手帖」（平成九年十月二十二日）として発行されました。

年代別、男女別の好きな詩や、応募の

刊行物紹介

中原中也記念館では左記の書籍を販売しています。

・歌集「末黒野」（復刻）

二、〇〇〇円

中学生時代に中原中也が友人と共著で出した私家版の歌集を復刻したもの。

・「中原中也研究」創刊号

・「中原中也研究」第二号

各二、〇〇〇円

あった作品名と件数などのデータのほかに、アンケートについての座談会の模様を掲載しました。また、応募者による「心に残る感想文」一六四編も読むことができます。

アンケートの記録集「天使の手帖」はA5判、六十四頁。中原中也記念館ご希望の方に配布していますが、希望者が多かったため初版はすぐに品切れとなりました。その後、増刷し、第二刷には残部が多少あります。

冊子の本体は無料ですので、記念館の受付でお申し出になるか、または返送用の切手を添えてお申込みください。郵便番号、ご住所、お名前、希望冊数をお書き添え願います。

なお、一人三冊以内に限らせていただきますのでご了承ください。一冊分の切手代は一八〇円、二冊分は二四〇円、三冊分は三二〇円です。

お問い合わせは、中原中也記念館まで。

中原中也の会が編集し、記念館で発行した年刊の機関誌。論文やエッセイ、記念館の館蔵資料目録、未発表資料などを収録。（一部の書店でも扱っています）

・「中原中也研究」第三号（近刊）

同右。特集〈中原中也とフランス詩〉

・中原中也記念館公開設計競技記録集

二、二〇〇円

記念館の建設にあたって全国から設計案を募集したコンペの記録。

一九九四年の四月二十九日、生誕90・3年祭からカウントダウンをはじめた平成DADA実行委員会主催の中原中也生誕祭（95年から中原中也記念館と共催）は、一九九七年四月、ついに本番の生誕90年祭を迎えました。

初日の四月二十七日（日）は最初の生誕90・3年祭のときに会場となった高田公園がおもな舞台となりました。当日は晴天に恵まれ、「中也、公園に遊ぶ」と題して、如月伶生さんのシャンソン、



高田公園で行われた「空の下の朗読会」

福島泰樹さんの絶叫コンサートや大道サーカス芸などが催されました。また、一般の人の自由参加による「空の下の朗読会」は、地元の文学愛好者や市内の小学校の先生や児童たち、遠方から駆けつけた熱心な中也ファンなどの積極的な参加で盛り上がり、朗読の時間が足りないほどでした。

新しい試みとして、中原中也記念館の建物と高田公園周辺の空き地を使って、市内の若手アーティスト荒瀬景敏さんと山根秀信さんによる立体的な現代美術「中也アート」も披露されました。

二十八日（月）は第二回中原中也賞の贈呈式がニューメディアプラザ山口で行

中原中也生誕90年祭

1997
4.29

われました。第二回中原中也賞が下関市の長谷部奈美江さんの詩集「もしくは、リンドバーグの畑」に贈られたあと、第一回の受賞作「夜の人工の木」の英訳出版が報告され、著者の豊原清明さんに贈呈されました。休息をはさんで、詩人・作家の辻井喬氏の記念講演「中原中也と日本人のコモンセンス」がありました。ちょうど九十回目の誕生日にあたる四月二十九日（火・祝）は、前年も前々年もメイン会場となった維新百年記念公園野外音楽堂で「中也、音楽堂に集う」と題して、朗読会、コンサートが催されました。ここ二年続けて雨に見舞われた中也生誕祭でしたが、九〇年祭ではようや

く晴れ晴れとした空のもとで開催することができました。第三朗読詩大賞は、過去最多の二百二十三編の作品が寄せられました。その中から宮城県仙台市の大館仁さん（三）と伊勢香さん（三）の男女二人の掛け合いによる作品「無題」に大賞が贈られました。

受賞者の朗読のあと、おたか静流、梅津和時、太田恵賢、フェビアン・レザパネ、ローゼンバーグ、伊藤比呂美、吉増剛造、マリリア、谷川俊太郎、高橋睦郎、佐々木幹郎の皆さんに



「中也、音楽堂に集う」の一場面。左より、高橋、谷川、吉増の各氏。

よるコンサートや朗読、パフォーマンスをお楽しみいただきました。今回はこれまで参加してくださった方々の再参加をふくむ国際的で豪華な出演者となりました。最終日の三十日（水）は、「中也生誕記念 加藤登紀子コンサート」が山口市民会館で開かれました。前日飛び入りで野外音楽堂のコンサートにも参加された

加藤登紀子さんですが、この日のために「汚れつちまつた悲しみに……」の詩に新しく曲をつけて歌われました。さて、当初の目標にしていた九〇年という区切りを迎え、生誕祭はここですっきりとたんしめくくることになりました。全国のみなさんに親しんでいただいた朗読詩大賞もそれによって閉じられます。

中也の故郷山口で、日本を代表する著名な詩人の方々の朗読を肉声で聞くことができ、朗読の面白さを実感できたと思います。平成DADA実行委員会の皆さん、お疲れさまでした。四回の生誕祭を通じて全国各地から生誕地山口を訪れてくださった中也ファンの皆さん、出演者及び関係者の皆さん、どうもありがとうございました。

◆平成九年度

○中原中也記念館○

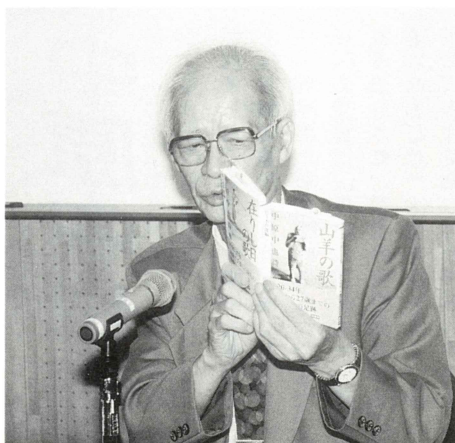
公開講座の記録

七月十二日から中原中也の会の協力で、山口市湯田温泉にあるサンフレッシュ山公園を会場に、中原中也記念館公開講座を開講しました。中原中也の人と作品を多くの方に理解していただくとうと、分かりやすい講座を目指して、平成八年度から始めたものです。申込みは七十四人。市内の方を中心に、遠くは関東からも受講されました。

第一回目は中也の実証研究の第一人者である吉田熙生氏。中原中也全集では大岡昇平らと編集委員を務めた経験もあり、テーマは「中原中也と大岡昇平」。大岡昇平の書き残した作品から、中也に対する大岡昇平の立場、関心のあり方を示す具体的な記述を抜き出し、丁寧に解説を加えられました。

八月九日は長崎大学助教授の中原豊氏の「『在りし日の歌』の世界」。詩集『在りし日の歌』の詩に発表誌・制作年を付して一覧表にまとめ、作品中の語彙から四季、一日の時間、過去、現在、未来を推測して、「青い瞳」「冬の記憶」などの詩を例に、この詩集の世界を「時間」を中心に解説されました。

十一月二十二日は秋の企画展のテーマに合わせ、横浜市立大学教授の鈴木和成氏により「中原中也とランボー」と題し



講演中の吉田氏

て行われました。ご自身が十八才の時に「中也のおかげでランボーを知った」そう、アフリカ、ヨーロッパを旅行して足跡を訪ねられたということでした。講座ではランボーとヴェルレーヌの作品、小林秀雄と中也のランボー訳の解説を中心に、「中也の詩は音を大切にしている」と話されました。

「中也の肉筆原稿を読む」と題した十二月六日は、新編・中原中也全集の編集委員である詩人の佐々木幹郎氏。「冬の長門峡」「酒場にて」の肉筆原稿の複写をテキストにして、「冬の長門峡」がなぜ毛筆で書かれているのかという素朴な疑問や、「寒い寒い日なりき。」がこの作

品の重要な言葉であることなどを指摘され、その推敲過程を詩の創作者として読み解かれました。

また、今年度は二回の特別講座（中原中也の会・中也生誕九十年記念大会への参加、記念館職員の解説による特別企画展の鑑賞）を設けました。

作品紹介や解説に加えて、あまり知られていなかった翻訳者としての中也の紹介、現存している肉筆原稿の複写を見る機会もあり、新しい中也の魅力を知ることができたのではないかと思います。

中原中也の会

中原中也生誕九〇年 記念大会

平成九年九月二十二日（月）、中原中也の会の大会が山口市内のホテルニュータナカで開かれました。

この大会で催されたシンポジウムと講演は、中原中也記念館の公開講座を兼ね、会員外の一般の人も聴講しました。

シンポジウム「中原中也とフランス文学」では、パネリストの飯島耕一、宇佐美斉、新井豊美の各氏が中也とフランス文学の関わりについて語られ、会場からも発言がありました。つづいて江藤淳氏が「中原中也と小林秀雄」の演題で講演をされました。

当日は会員内外の百六十一人が参加して、豪華な顔ぶれによる密度の濃い話に聞き入りました。

一 小企画展

中也の習字

記念館では一階展示室の小さなスペースで、一〜二か月ごとにテーマをかえて小企画展示を行っています。これまでも「教科書に載った中也の詩」「中原医院の歴史」「記念館の建築とデザイン」などの展示をしてきました。

昨年八月から十月までは、中原家のご協力により、「中也の習字」と題して、小学生時代の習字を中心とした展示を行いました。

中也は習字が得意でした。これまでも写真集などでその一部が紹介されていますが、今回展示したのはほとんどが初公開のもので、中也の習字は低学年から高学年までまんべんなく大切に保存されており、学年を追うごとに上達していく様子が見えられます。兄弟の中で中也の習字だけが驚くほど多く残されていて、幼いころの中也を知るうえでも貴重な資料となっています。

展示する習字は一週間ごとに入れ替え、期間中に延べ百点以上をごらんいただきました。

また、中也の母フクの色紙や愛用の筆、硯などの品もあわせて展示しました。

訪れた人たちは、少年中也の筆運びに見入っていました。

中原中也記念館の記録

■平成九年

三月三十一日（～五月二十八日） 小企画展示「第二回中原中也賞」

四月二十六日 村井福子氏より中原フク・呉郎筆の村井康男宛て書簡を寄贈。

四月二十七日（～二十九日） 中原中也生誕90年祭（平成DAD Aと共催）

四月二十七日 「中也、公園に遊ぶ」空の下の朗読会（自由参加）
／福島泰樹 絶叫コンサート／中也サーカス（ヌーボーキャレの大道芸）／中也アート（荒瀬景敏・山根秀信）

場所 高田公園（中也アートは中原中也記念館でも）

四月二十八日 第一回運営協議会

第二回中原中也賞贈呈式（山口市教育委員会主催）

記念講演 辻井喬「中原中也と日本人のコモンセンス」

第一回中原中也賞英訳詩集贈呈

場所 ニューメディアプラザ山口

四月二十九日 「中也、音楽堂に集う」（NHKラジオで実況生放送）

出演 谷川俊太郎、ジェローム・ローゼンバーグ、吉増剛造、伊藤比呂美、佐々木幹郎、高橋睦郎、マリリア、フェビアン・レザルパネ、おたか静流、梅津和時、太田恵資、朗読詩大賞受賞者ほか

場所 維新百年記念公園野外音楽堂

「私の好きな中原中也の詩 一、〇〇〇人アンケート」募集開始

四月三十日 加藤登紀子コンサート

場所 山口市市民会館

五月二十九日（～七月三十一日） 小企画展示「雑誌で紹介された中原中也」

五月三十一日 中原中也の会 第一回研究集会

研究発表 長沼光彦 二木晴美

小講演 吉田加南子「森の中では死んだ子が／蛍のように蹲んでる」

講演 中村真一郎「中原中也と私」（インタビューアー 中村稔）

場所 日本近代文学館

六月三十日 「私の好きな中原中也の詩 一、〇〇〇人アンケート」応募締切り

七月十二日 芳賀肇一氏より「ダダリスト新吉の詩」を寄贈。
公開講座「中原中也と大岡昇平」

講師 吉田熙生（城西国際大学副学長）

場所 サンフレッシュ山口

七月十七日 中垣芽美氏より中垣茂樹氏所蔵アルバム（長谷川泰子の写真あり）寄贈

八月一日（～十月二十日） 小企画展示「中也の習字」

八月九日 公開講座「在りし日の歌」の世界

講師 中原豊（長崎大学教育学部助教授）

場所 サンフレッシュ山口

「私の好きな中原中也の詩 一、〇〇〇人アンケート」座談会

出席者 中原豊、和田健、横田昌子、福田百合子

場所 中原中也記念館

九月二十二日 中原中也の会「中原中也生誕90年記念大会」（中原中也の会 主催）

シンポジウム「中原中也とフランス文学」

出席者 新井豊美、飯島耕一、宇佐美斉

記念講演「中原中也と小林秀雄」

講師 江藤淳

場所 ホテルニュータナカ

九月二十三日 中原中也の会・文学散歩（津和野 森鷗外記念館他）

中原中也生誕90年・没後60年メモリアル

「復活・スルヤ演奏会'97」（共催 スルヤ実行委員会）

作曲 溝上日出夫 / 舞台監督 矢野節 / 演出 桑原智恵

出演 桑原英子（ソプラノ）、藤川泰彰（テノール）、末廣正巳（バリトン）、神田寛明（フルート）、宮澤等（チェロ）、水谷真理子（ピアノ）、諸井泰子（ピアノ）、YMフラウエンコール（合唱）、三隅洋子（指揮）、加賀美幸子（語り）

場所 山口県教育会館ホール



十月十八日 全国ポランテア大会参加の紀宮清子内親王来館。
十月二十二日（～十一月二十四日） 特別企画展「中原中也とランボー」

碑前祭 朗読（長谷部奈美江 ほか）、ハーモニカ（伊藤拾郎）、現代舞踊（加藤舞踊学院）、思い出の一言、献花 ほか

場所 高田公園「帰郷」詩碑前

「天使の手帖」（私の好きな中原中也の詩一、〇〇〇人アンケート）集計結果）発行

ジョイントコンサート「一つのメルヘン」

出演 長谷川きよし、吉行和子、福島泰樹 ほか

場所 山口県教育会館ホール

十月二十五日 公開講座 企画展の鑑賞（特別講座）

解説 記念館職員

場所 中原中也記念館

RKB「今日もどこかで ～中原中也、その故里～」放送

十一月六日 第二回運営協議会

十一月七日 記念映画上映「太陽と月に背いて」（共催 西京シネクラブ）

十一月二十二日 公開講座「中原中也とランボー」

講師 鈴木和成（横浜市立大学国際文化学部教授）

場所 サンフレッシュ山口

十一月二十六日（～一月二十八日） 小企画展示「アルチュール・ランボーの関連図書」

十二月六日 公開講座「中也の肉筆原稿を読む」

講師 佐々木幹郎（詩人）

場所 サンフレッシュ山口

十二月二十日 第三回中原中也賞応募締切り

十二月二十九日（～一月三日） 年末年始休館

■平成十年

一月十八日 九州朝日放送「るり色の砂時計」で「ゆきてかへらぬ

山口市・中也の旅」を放映（地域により放送日別）

一月二十九日（～二月二十五日） 小企画展示「詩園」—中也遺稿を発表し続けた同人誌—

一月三十日 開館二〇万人突破

二月十八日 開館四周年

二月二十一日 第三回中原中也賞選考会（山口・西村屋旅館）

宋敏鎬氏（愛知県）の詩集「ブルックリン」（青土社）受賞。

二月二十六日（～四月八日） 小企画展示「近年の中也関係出版物」

中也ゆかりのひとびと

第3回

特・別・編

ラジオ番組「中原中也を偲んで」

特別番組「中原中也を偲んで」をお送りいたします。では、詩碑建設に力のあった評論家小林秀雄、作家大岡昇平の両氏、それに母堂の中原福さんにお集まりいただいて、これからのひと時、山口市社会教育課長和田健さんの司会で、詩人中原中也の思い出を綴ることにいたします。

和田 中原中也の詩碑ができ、除幕することに相成ったわけですが、今日は小林先生、大岡先生、お母さんの中原福さんもお見えになってます。今から色々、中也を偲んでの思い出話をお聞かせいただきたいと思ひます。中也につきましては、殊に小林先生、身近に青春時代に交わつてらっしゃいますが、中也というところが浮かんてくるお話はございませんでしょうか。

小林 逸話ばかりみたいな人でしたから、それは色々あるけども、とてもつきあいにくい人だったね。しょつ中喧嘩をして……。僕は喧嘩はしませんでしたがね。ああいう人の書いた言葉というものは、段々と影響しているものなんです。色んな人が色んな風に読んで覚えている。それが段々積もり積もって今度の詩碑のような事になった。大変感慨が深いですね。あの人も生きていた頃は自分の声がかんんに広まるとは思っていなかったでしょう。世間はそう聞いてくれるとも思っていなかったでしょう。

和田 テンポは遅いけれど、中也の詩の心だとか作品だというのが、次第に若い人達にも愛されてきつとあるという。非常に変わった行動が多かったという事は色々私達も聞いております。夕方街をさまよってお酒なんか飲んだり。その時、詩を書いた原稿を着物の懐なんかに突っ込んで、いつしかその詩が無くなって。

小林 詩のことはかり考えてた男だけれども、完成した言葉で詩をかつちりまとめてそれをまた後からなおしたり、そういう風じゃなかったからね。あの人の詩というものは生活と一緒にしてね。どんどん出てきたもので、一つこしらえとすぐまた先のことを考えるという風な作り方ですからね。だから言葉を重んじなかったですよ。重んじる余裕も無かった。本当に詩が生活になってた人ですね。詩を生活してきた人間で、やはり一つの強い感じを持っています。それが積もり積もって、ある時間がかかったと思うんですね。

和田 お年は、中也さんと一つか二つぐらい大岡先生の方がお若いんですか。

大岡 ええ、だけでも中原はませてましたからね。僕が二つ違ひっていても、四つも五つも違つたようになるんじゃないですか。前から小林さんなど年上の人と付き合っていたし。会つたのは今の年という僕が十八で中原が二十歳の時ですがね。

和田 それっきりなんです。別れちゃったわけですか。

大岡 いやそんなことはない。喧嘩をしたり色んな事をしたわけ。友達の中で詩碑というのが建つのが初めてでしてね、中原が。僕は大体詩碑というのはそう賛成ではないんで。つまり、石が何千年も居ますからね、そこまで人間が残るかどうかなんですけども……。そこらじゅう詩碑が建つて中原のが建たないっていうと、少し癪に障るような気もしてたんで……。そう、小林さん、心の声のまま言葉になって……。だけど割合に字をいじつてるものもあるよ。「冬の長門峡」なんかの詩も随分いじくりまわしてますね。

和田 推敲に推敲を重ねたという……。

大岡 まあそれは非常に珍しいですけどね。そういうのもありますよ。

和田 まるで吐き出すように詩が浮かんてくる、或いは書き付けていった……。

大岡 ええ。詩というものはこういうものだというセオリーがありましたね。僕なんか専ら色んな事を、理屈を教えてくれました。

小林 そりやセオリーだらけだよ。ただそれをあんまり守ってないよね。セオリーがしょつちゅう違うしね。非常に片っぽでは理屈っぽい人でしたよ。いつでも理屈をこねてたからね。

大岡 そうだね、年中理屈ですね、話は。全部理屈だったですよ。

和田 終戦後、大岡先生が中原家にお見えになった時、あの時は中也の尋常小学校の時の書き方を、甲の上だつて非常に感嘆していらつしやつた。お母さん、中也さんの字ですね、非常に大事に残していらつしやいますか……。

福 皆さんが、くれとおつしやるし、差し上げよりましたから、もういいのは無くなりまして少しかしいのが残つております。

和田 今、拝見しても非常に立派ですが、あの字から受ける中也の感じは、真面目なきちんとした少年のように思ふんですが、今思ひ出されていかがですか。

福 理屈っぽい男でございましたから、よく叱られたものでございます。

和田 山口には中学校三年までで、それから京都、東京と。時々帰つてらつしやつたんでしょか。

福 しょつ中帰つて、玄関で顔見たら「すぐ行つてもいい」なんて申しておりました。

和田 山口での中也の印象、帰られた時の一種異様なスタイル、どんなスタイルだったかおつしやつてくださいませね。

福 マント着たのがございませう。あれでございませう。ひだの一杯ついたのが流行りはじめで、ああいうのが欲しいと言いますから、こしらえてやりました。あれは京都に行つてから写しました。

和田 全集だとか詩集の口絵に載つてる写真ですね。背が低いから、高い朴^は齒^はの下駄を履いて、山口の街を闊歩していたという風に聞きますけれど、中也の詩の原稿を、戦時中ははやく預かっていたことがございます。その中で「散歩生活」というのがあった。日常の生活が本当に歩きづめに歩いているという……。

大岡 そう、歩くのが好きでしたね。あの頃は東京も開けてませんし、車も多くないですから、どこでも歩く道があつたんです。歩くのも好きだったけど他にすることもないからね。僕だつてみんな歩いてましたよ。

和田 あの時、ちょうど左翼の詩もシュールの詩もございませぬ。その中で日本の抒情、新しいフランス詩の影響を受けた中田は、どういふ所に特徴がございませぬでしょうか。例えば、非常に影響を受けたフランスのランボーとかヴェルレーヌだとかどういふ関係があるのか作品の上でお聞かせ願ひたいと思ひます。

大岡 若い詩人、非常に早熟な詩才があつたという事で、ランボーとよく例えられるんですけど。当人はヴェルレーヌのほとんど一辺倒だつたですね。詩でもやつぱりそうなんじゃないのかい。ランボーに似てるってことはほとんどないんじゃないかな。

小林 氣質としてね、ランボーには縁の無い人ですね。あの人はやつぱり人間ですよ。興味を非常に持ったのは、人間ですからね。人間との交渉。非常につまらない面倒臭い事にも興味を持つ。人間関係つてのね。そういうものはランボーには無いんです。そこは中原は違ひますね。やつぱりヴェルレーヌの方でしたね。

大岡 下宿屋の小母さんでもね、その辺の飲み屋に居る姉さんでも主人でも誰にでも興味を持つて、彼奴はこういう奴で生活はこうだつて、まるで小説家みたいな風にな。

和田 河上徹太郎先生が中田の詩の中の宗教性、宗教詩人だといふ事を書いてらっしゃいます。おばあさんがカトリックの熱心な信者であつた影響といふものもございませぬでしょうか、中田の詩の中或いは中自身の中にですね。

大岡 それは難しい問題で一言で言えないんです。鎌倉でも教会へ行つたりしましたけども、結局最期にも入れなかつたんですよ。そこははっきりしないんじゃないでしょうか。

和田 割に中田に郷土をうたつた詩が無いんです。「冬の長門峡」「帰郷」だとか、二、三ぐらい。郷土を愛しながら、あまり望郷の詩が無いように思ひます。

大岡 文人仲間と喧嘩しちゃうもんですから、関口といふ文部省の古手と仲がいいんですよ。そこへ行くと故郷の事を年がら年中、とにかく故郷の話ばかりして居るわけですね。ああ故郷が恋しくつちやあ、しようがないなあつて関口がよく言つてましたね。

和田 お母さんいかがです。中田さん、手紙をよく書いてらっしゃいましたか。非常に親のことを思つたりそれから故郷のことを思つたり…。

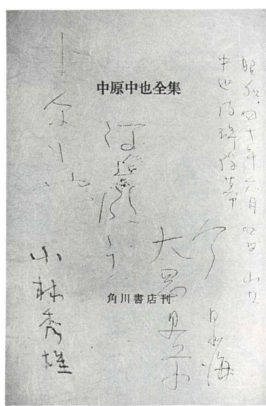
大岡 お母さんとかには、金送れといふ手紙だけでしよう。

福 そうなんですよ。あれが死ぬと同時に、私みな焼いてしまいました。こんなお金の催促ばつかりの手紙、長く置かない方がいいと思つて。皆さんはくれと言われましよう。そんなじやつたらお金の催促も案外良かったかもしれんと思ひますけど。

和田 毎月百円ぐらい、学資、生活費をお家から送つてた聞いておりますが。

福 初めに七十円送つておりました。どうも帰つてくると瘦せておるようございませぬ。牛乳でも飲んだら良からうつて、十円ほど増やして八十円ずつ送つて。

大岡 そりや贅沢ですよ。昭和の初めですもの。



『中原中也全集』(和田氏蔵)

小林、大岡、河上徹太郎、今日出海署名

和田 その頃は山口で、県庁や市役所の役人、課長あたりでも五、六十円じゃございませぬ。まさに部長クラスですね。今度、井上公園(高田公園)に碑ができたわけですが、お母さんのお気持ち、どんなにございませぬでしょうか。

福 ありがたくて、どんなにお礼申し上げていいやらと思つております。山口のお方も、先生方も大変ご尽力くださいましたから、これをどうかして死んだ人に知らせる方法があつたらええと思ひますけど。ある宗教家の方が、あなたよりも先に死なれた方のほうが知つていらつしやいますよつておつしやつてくださりましたからね。ああ、成程そうかもしれんと思つて。

和田 碑の詩句ですが、小林先生、大岡先生お二人で色々ご相談くださったようですが、「帰郷」に落ち着きたいささつはいかがでございませぬでしょうか。

大岡 それは色々考えたんですがね。中原が一番知られて居る詩、教科書なんかにも出ている詩といふと「汚れつちまつた悲しみに…」、その他もつと格調の正しい優れた詩もある。「帰郷」が優れてないといふわけではないんですが、山口に建つについては、あれが一番いいだろうと。

その中で一番印象的な詩句を…。間を二行とばしてあるんでね、中也怒るかもしれないと思つてすけども、今の言葉としてわかり難い字があるもんですから。

和田 実際、碑を建てるといふ事は大変で、この募金も全国的に集まつて、百七万集まつたわけです。山口県に百万もする文学碑ができたといふのはおそろく空前絶後ですが、建碑にあたり、先生方のご感想を聞かせていただきたいと思ひます。

小林 今度、私は字を書かされちゃつて、これはまあ長年付き合つた友人の碑だから仕方がない。お引き受けしたんだけど。色紙だつてみんな僕は名前しか書かないんですよ。でも今度は思い切つて書いて私の悪筆がそこに彫られて、何だか恥ずかしくてね。感想つてたらそんなもんですな。

大岡 ありや立派なもんで、びっくりしちやつた。小林があんなにうまいとは誰も思ひなかつた。

小林 書く時に、ちよつと原文とは違ふんですがね、本居宣長の説で、言葉は日本の言葉があれば、字は仮のものだからよろしいでしょうと僕は思ひましてね。あんな風にしたんです。

和田 設計の志水晴児さんも素晴らしいですね。

小林 あの方も一生懸命やつてくださつて。なかなかあれは立派な碑ですよ。

大岡 和田さんと一緒に草鞋履きで山の中へ入つて行つて石を掘り出してきたつていふ話を聞いたんだけど。

和田 何遍も滑りこけてね、やつとああいう石が見つかつたわけですよ。

大岡 いい人がうまく見つかつたなあ。報酬とかそういう事を離れて一生懸命やつてくれましたからね。

和田 山口市長の兼行恵雄さんも、この建碑の会長として名実ともに努力されたわけですよ。皆さんのおかげでめでたく碑が出来上がったといふところでございませぬ。どうもありがたうございませぬ。

(「中原中也を偲んで」KRYラジオ 昭和四十年六月六日放送)

掲載にあつて、KRY山口放送株式会社と和田健氏のご協力をいただきました。

★第三回中原中也賞決定

宋 敏鎬さん

ブルックリンに

(青土社)

平成十年二月二十一日、山口市湯田温泉の西村屋旅館で、第三回中原中也賞の選考会が開かれ、応募総数二二八点(公募二一七点、推薦一一点)のうち最終選考に残った六点の詩集について協議されました。

その結果、愛知県名古屋市の心臓外科医、宋敏鎬(そんみんほ)さん(三)の詩集「ブルックリン」(青土社)が選ばれました。贈呈式は四月十一日、山口市内で行われます。

宋さんは一九六三年十月十六日、名古屋市生まれ。一九八四年から一九八七年まで「菊屋」同人、一九九七年には「ユリイカ」の新鋭詩人に選ばれています。受賞した「ブルックリン」は宋さんの第一詩集です。選考委員を代表して中村稔氏は「わが国の伝統的な抒情性とは無縁な反抒情的、非抒情的な乾いた姿勢、日本語の表現への批評性、異国に滞在するマイノリティーの視点が認められる」と評価しました。

選考の経過は「ユリイカ」(青土社)の四月号に掲載、受賞詩集は英訳して刊行されます。

ブルックリン



詩集「ブルックリン」

受賞者の談話



宋 敏鎬さん

多くの作品の中から私の詩集が選ばれたことを感謝します。

この詩集は、一九九五年から一年間ブルックリンの病院で医師として働いた経験がきっかけとなってできたものです。詩を書き始めたのは大学生の頃で、二十代前半に数年間書いていましたが、医師になって以降はしばらく遠ざかっていました。日本語でない世界で生活している、日本語に対する愛がよみがえり、詩のいくつかの行が浮かんできました。中原中也の父親は医師であり、息子である中へは、家業を継ぐことを望まれていたと思いますが、詩の世界で名をなしました。そのような中也の名を冠した賞を受けるのは、不思議な巡り合わせを感じます。

これからも、別の世界を探求していくつもりですが、今回の受賞で大きな励ましをいただき、背中を押してもらったような気持ちです。

●開館四年目

入館者数二〇万人突破

平成十年一月三十日、記念館は開館以来二〇万人目となったのは、福岡県小郡市の会社員河崎正実さん(三)です。河崎さんはこの日、会社の先輩二人と旅行の帰りに湯田温泉に立ち寄り、中原中也記念館を訪れたものです。

河崎さんには福田百合子館長から花束と中原中也詩集、記念品が手渡されました。また中也の義妹にあたる中原美枝子さんからも中原中也の文学アルバム(写真集)が贈られました。



福田館長より花束を贈られた河崎さん

河崎さんは「二〇万人目と聞いてびっくりしました。こういうことは初めてなので、たいへんうれしいです。中也の詩は学校の教科書で知っていました。詩集をもらったので、ぜひ読んでみようと思います」と話していました。

第四回 中原中也賞 募集

【対象】平成九年十二月一日から平成十年十一月三十日までに刊行された現代詩の詩集(奥付の刊行年月日による)
【応募方法】著者本人が同じ詩集三部を「中原中也記念館気付 中原中也賞事務局」へ送付。
〒七五三-〇〇五六
山口県山口市湯田温泉一-一-二二

「中原中也賞応募」と明記の上、本名、年齢、住所、郵便番号、電話番号を記入したものを添付して下さい。原則として、詩集は返却されません。
【応募締切】平成十年十二月十八日(必着)
【正賞】受賞詩集を英訳本として出版。
【副賞】百万円

【選考委員】荒川洋治、北川透、佐々木幹郎、佐藤泰正、中村稔、吉田熙生(五十音順)
【発表】平成十一年二月の選考会終了後、報道機関を通じて発表。「ユリイカ」(青土社)四月号に掲載。

【主催】山口市
【後援】青土社、角川書店
【事務局】山口市教育委員会 文化課内「中原中也賞事務局」
〒〇八三九(二〇)四一一

編集後記

生誕九〇年没後六〇年の記念行事が目白押しだったこの一年。お知らせしたい話題も多く、第三号は増頁でお送りしました。これらの催しが一時的な賑わいに終わることなく、中也と読者との新たな出会いのきっかけになるように期待します。

●発行 中原中也記念館 館報 第三号 平成十年三月三十一日
〒753-0056 山口県山口市湯田温泉一-一-二二 TEL)〇八三九(三)一六四三〇 FAX)〇八三九(三)一六四三二